

克典

bitch volume 2

「圭祐、悪いんだけど、ここ行ってきてくれ」

店に入ってきた御子柴はカウンターで呑んでいた圭祐のところに行き、紙片を押しつけた。住所が書いてある。

戸惑っている間に、数枚の紙幣を渡されて、断れなくなった。

「なんでもよ、あの野郎、『現金は無理だけど金目のものを用意したから見逃してくれ』だよ」

「金目のもの」

「貴金属とかじゃねえのか」

急いでいた御子柴は、圭祐を置いてけぼりにして、店を辞去していった。

「お会計」

「行くの？」

「一応行かなきゃしようがねえじゃん？」

御子柴を乗せた車が駐まった。

「ここです」

運転手に案内されると、終夜営業のマンガ喫茶だった。

「寝泊まりできるのか？」

「リクライニング・シートと毛布しかないですけどね。」

「向かいますか？」

緊張した運転手が訊く。

「慌てるな。人一人バラすにも段取りってもんがあるんだ。バラしてそのあとどうすんだ？ 運ぶにも埋めるにも根回しが必要なんだ」

御子柴は組のカネをくすねた狩野とは同期だった。

御子柴の子飼いが狩野の潜伏先を探り当ててしまった。子飼いは運転席に座ってい

る。

「そういうもんなんすね」

「しばらく待ちだ」

子飼いから一報を受けて、御子柴は狩野に連絡を取った。

「お前、そろそろガラさらわれるぞ？」

「何とかならない？ ねえ、何とかならない」

「肚括ってたんじゃねえのか？」

「括ってたさ、括ってた。けどよ、やっぱり

……」

「はじめつけなきや、組も面子つてものがあ
るからよ」

「現金じゃなくてもいいか？」

御子柴は換金の手間が掛かることに索然としながらも相槌を打った。

「しょうがねえな」

紙片に記載されていた住所には古いマンションが建っていた。

蛍光灯が切れかかった廊下に沿った扉の羅列。その一つに対峙した。

紙片には住所の他にもう一件記載事項があった。「郵便受けの裏」。手探りしてみると、置き鍵。

鍵は開いた。

深呼吸をしてから、扉を開けた。

フードを被った狩野が裏口の扉をすり抜けた。スポーツ・バッグを手に提げている。小径を縫うように歩を進め、まだ無人のオフイス街へ向かった。

一台の車が迫ってきて、歩道を歩いていた狩野の進路を塞いだ。

嬉々として打ち明けた。

痺れを切らした御子柴からの発信が携帯電話に届いた。

圭祐が開けた扉の裡には、女が、いた。

憂は、若くて、器量好しだった。

圭祐の闖入に一旦は愕いたものの、取り乱さなかった。

「彼のお友達ですね？ お通しするよう言付かってます」

菩薩の微笑。

「彼ももうすぐこちらへ来るらしいですから」

促されるままに従った。

女は荷造りの途中らしかった。

「彼と旅行に行くんです」

轆かれ掛けて狩野が動揺している間に車から人影。

御子柴と運転手。

狩野は何事か云おうとした。

御子柴は無視した。

黎明の裡、スーツ・ケースを引き摺る憂。

感情が排されると貌だちが整っていることが引き立つ。

そう遠くない、銃声。

憂は立ち止まりもしなかった。